

過去・現在・未来の原典生諸君へ！ (February 10, 2019)

原典研究所主宰 齋藤瀛涯

■原典研究所創設以来23年目を迎えた2019年正月早々、新年度初の講義が行なわれたまだ松の内の5日に、大江弘之、佐藤翔、三村一貴の三君がわざわざ来所され、「塾生有志による稀観書購入に対する寄付」を申し出られ、大いに恐縮しつつも、有難く受領致しました。今回新たに購入したのは、ラテン語関連のもとしては極上の『キケロ全集』(Ciceronis Opera、全10巻、1783年、Oxford刊)、リウウィウス(全4巻)およびタキトゥス(全2巻)の全集【以下、原題・刊記とも略】、またルネッサンス期のものとしては、フランス・ユマニスムを代表する2巨峰、ラブレールの1巻本全集、およびモンテーニュの超豪華版『エッセー』全6巻【前3巻は、1588年刊行の第4版の欄外に著者自身の手による、ほとんど本文に匹敵する分量の訂正や書き加えが施された、いわゆる「手沢本」(ボルドー本)の影印版で、後3巻は、刊本に付加部分を併せてモンテーニュが最終的に企図した〈姿〉に復元されたものとしての〈テキスト〉を、統一的文体で現代フランス語に正確かつ流麗に翻訳したもの】、加うるに、デカルトおよびスピノザ【全集は既有】に並び、「古典時代」(17世紀)の誇る天才哲学者の一人、ライプニッツの『全哲学論集』【独・仏・ラテン語による諸論稿を集大成し、19世紀半ばに刊行された大辞書なみの大型1巻本の復刻】などが含まれています。

■以上、今回の御寄附に対する心からなる謝意を表明するとともに、いわゆる〈稀観書購入〉についても最低限の〈説明責任〉を果たすべく、主たる購入書に若干の書誌的解題を付してこの間の経緯を明示することとしました。ところで、上文にあえて「今回の」の文言を用いたのは、言うまでもなく、すでに二度に亘って「謝辞のメッセージ」を發したことを踏まえたものですが、前者は2008年9月5日附の、稀観書中の稀観書たるステファノス版『プラトン全集』(全3巻、1578年刊)、後者(2013年4月30日附)は同版の『ギリシヤ主要英雄叙事詩人集』(全2巻、改装版全1巻、1566年刊)の2冊の購入に際して、両書のもつ比類なき文化史的価値を深く理解した新・旧の原典生諸君より寄せられた多額の寄附に対するものでした。

■しかし、前2回のステファノス版【4分冊は全て実物、16世フランス・ルネッサンス期の出版史の白眉】と、今回購入の諸版本【ラテン語版はむろん実物です】が、〈稀観性〉の観点からは多少異なる性格と意義を有つことは、実際には、10年来漸次進展し続け、とりわけ近年に至って完全に顕在化した原典研究所の諸〈営為〉の根本的变化、すなわち創設当初の本願でもあった〈記述論的言語学〉の講義と実践の道場へ、の徹底的転換を示すものであり、それは筆者のみならず受講生にとっても「疾風・怒涛」の日々でした。

■この間の経緯は、一昨年春（2017年3月25日）東京・神田の学士会館で挙行された「原典研究所創立20周年記念式典」に際し、出席者に頒布された『文集』、なかでもその第二部『記述論の曙に寄せて』に所収の、塾生諸君の手になる真摯かつ犀利な諸論攷が余す所なく見事に活写している通りです。そもそも、〈記述論〉とは、半世紀にも亘って（筆者は来年「古希」を迎えます！）筆者が自ら実践しかつ唱道してきた、いわば「〈テキスト論〉の総体」を若き日にかりそめに〈僭称〉したのですが、実際に参看し得る文献としては、（1）1968年5月に私家版として刊行された詩集『氷河紀』を原点とし、その前後に書き散らされた10代の雑多な「若書き」の断簡類から、（2）20代の末年以降10余年に及んだ種々の〈記述論的〉試行と、それらの能う限り正確な〈テキスト化〉を企図した〈エッセー〉、『現象学的方法としての〈記述〉——附、註記「記述について」』（『河合おんぱろす 1992（第2号）』、河合文化教育研究所、1992年8月刊行）、及びその刊行後筆者が立ち上げた「記述論懇話会」の文集『記述論の夕べに寄せて』（記述論懇話会、1993年5月発行）、（3）更には本来筆者の知人宛ての私信（2000年4月）であったものが、いつしか一編の独立した〈稿本〉の如く所内で流通している『「バルタザール」考』など、長短さまざな雑稿類が数点残存しているに過ぎません。このうち、高校卒業以来永らく封印し忘却の淵に沈むに任せてきた（1）、及び本質的には「考証録」にすぎない（3）は、概ね塾生諸君の個別の関心と自発的探究に委ね、日々の講義と講読に際しては専ら（2）の両書を終始座右に置いて、諸原典の読解上〈記述論的疑義〉が生じる度に、煩を厭わず当該の問題に関説する箇所を参照し、真に意義ある解釈・訳解に到達し得る〈方途〉を探るべく、著者ともども受講生も常にその探究に主体的に参加し、最大限の努力を重ねて来ました。かかる事態が原典研究所に恒常的に出来るのは、〈記述論〉が〈論〉を標榜しつつも、それ自体としては「学説」でも「イデオロギー」でもまた「理論」でもなく、むしろ塾生諸君に対して〈原体験〉としての「言語空間」の〈体得〉と（母語としての）「国語」の諸力の〈練磨〉を事とする、〈発見論的〉heuristic 意味における根源的〈知の道場〉を志向しているからです。

■かくして、筆者にとってはいわば「失われた時を求めて」、受講生にとっては「真にあるべき自己を求めて」、日々互いに「切磋琢磨」する望ましい関係が築かれたのです。長年に亘る一風変わった大学受験指導の「英語教室」であることを已め【事実、この3年間高校生の募集は停止】、専ら大学生以上を対象に、とりわけ昨年は、語学関連では凡そ4年を費やして『古典ギリシヤ語文法入門』を経た、プラトンの対話篇『エウチュプロン』の講読（終了）、同じく4年前の『フランス語文法入門』に端を発し、なおも継続中の

デカルト『方法叙説』講読、更にドイツ語では、現下の世界情況の理解に最適なシュペングラー『西洋の没落』講読（終了）、等が行われました。しかしそれと同時に、昨秋には新メンバーによる『古典ラテン語入門』が新規開講され、また受験生向けの『英文読解』も4年ぶりに復活するとともに、更に、ロシア語読解講座にドストエフスキーの『罪と罰』が所望されたり、イタリア語の講読にも少なからぬ希望者が現れたり、旧来の「紙の本」廃絶に対する心ある若き「読書人＝教養人」の必死の抵抗が切実に感得されます。

■ところで、前節に略記した原典研究所独自のいわゆる「原典語学」の現状にも勝って遥かに重大なこととして、昨年夏に一応の終結を見た『原典世界史』(vol. 1)については、ここで些か立ち入った説明が必要です。この「数奇な」成り行きを辿った連続講義は、日頃「新たなオリエント学」立ち上げを唱えていた筆者にとっては、原典研究所創設以来最大かつ最重要の懸案事項であり続けて来たものでした。その主たる理由は、(1) 創設時に配布した教室案内(2種)の内、原典研究所の「講座要項」に謳われた「聖典研究会」等を始めとする諸研究会の講座が実現に至らなかったこと【この種の正統的な「人文学」が社会の高度情報化の余波を受け、大学での扱いが粗略になっているにも拘らず、視野を広く海外に転じれば、この20年余りの期間に新発見され、あるいは蓄積された〈知見〉の量は膨大であり、関連する文献の出版数にも陰りは見られません。ただ、超世俗化した日本はもはや蚊帳の外で、極初歩的な入門書か超高度な専門書以外は邦書では入手不可能です】

(2) 10年余り前、『〈言語史・宗教史・文化史を中心とする〉原典世界史概説』と銘打った全10講からなる連続講義【『第1講 メソポタミア史——アッシリア学入門の入門』から『10講（特別講義）——世界史の中の日本近現代』まで】を初夏から初冬にかけて行いましたが、当時は受験生が主たる対象であったこともあり、質・量ともに全く不十分かつ意に満たないものであり続けたためです。そこで、熟慮の末、上記(1)の「講義要録」Syllabusを全体の骨格とし、そこに含まれていない項目は適宜増補しつつ、時には「余説＝特別授業」を設け、更には(2)の「講座要項」に挙げられている諸「聖典・原典」を上記の「全体的骨格」に主題的に重ね合わせて解説することに務めました。そのため言語史・宗教史・文化史、および一般言語学の全てに亘って、一応満足のいく講義が出来たと思っています。かくて「原典研究所設立20周年記念連続講義『原典世界史概説』」が4年前の8月第1週、「古代シュメール」から始まって丸3年、1講義各150分、全150回、この間展覧に供した原書は数千冊を数える、恐らくは前代未聞の「スペース・オデュッセイ」あるいは「大航海」が、東南アジアを除く古代の全世界を隈なく周遊して、昨年7月の最終週について無事の帰港を果たしたのでした。

■ さしあたり前項の説明は塾生、なかんずく実際の講義に殆ど無休で列席し、文字通り「同行者」として幾多の辛酸と艱難を共にしつつ、全行程を踏破した受講生諸君には、至極妥当なものとして首肯されることと思いますが、ここに敢えてもう「一事」贅言を要する重大な理由が、筆者には存在するのです。本稿2頁目の中程に、ほぼ30年前に初めて公開に及んだ〈記述論〉の試行と概要が(2)類として略記されていますが、そのうち〈註記〉Ⅱ、[α]【『河合おんぱろす』140頁参照】に、この〈エッセー〉をいわば一つの「方法叙説」に見立てた場合、向後〈記述論〉の取り組む主たる「課題」は何か、について以下の様な趣旨の註記があります。それは要するに[α]『記述者の誕生』、また[β]『神々は記述に宿る』を根本「テーゼ/テーマ」として〈記述論的〉読解と考察を極限まで深めよ、という運命的な人生の選択でした。

■ 端的に云えば、〈記述論〉とは、「人文学的に」何らかの意義を有するとされるいわゆる「諸原典・諸聖典」類の読解に臨む際に生ずる、「そもそもこれはいかなる〈テキスト〉なのか」、という根源的かつ不可避の〈問い〉に対して、従前の通釈とは根本的に異なりしかも可能な限り正確な〈答え〉、つまりは新たな読解の「方途」を探る〈営為〉を指す、筆者が久しく【もしくは野放図なまでに恣意的に】援用している「用/術語」です。しかしそれではこうした「神聖なテキスト」の成立に関与した無名にして無数の、本稿に謂う所の〈記述者〉達の「言語体験」それ自体、更には彼らの「表現意図」はどういうものであったのか？ 一体、彼らはどのような人間であったのか？

■ 日用/俗用に供する諸文書作成に携わる〈記録者〉とは、かかる文脈においては、前節の〈記述者〉と截然と区別される必要があります。なぜなら、これらの諸文書こそが殆どの「歴史書」が何よりもまず第一に依拠すべき「根本史/資料」でありながら、その性質上多くは廃棄される運命にある上、それらの読解を担うのは文法学を含む、広義の〈記号論〉に外ならないからです。これに対し、例えば〈記述論〉の課題[α]『記述者の誕生』の探究に当たって、筆者が「記述文化」の濫觴たる最古代【紀元前3千年前後】にまで探索の手を伸ばし、メソポタミア【シュメール、アッカド、バビロニア、アッシリア等】の「楔形文字」系諸言語、またエジプト【古・中・新エジプト語に分かれ、紀元後のコプト語にまで及ぶ】の「聖刻文字＝ヒエログリフ」系諸言語の独習に10数年を要するに至ったのも、人類最古の〈記録者〉群の中から〈記述者〉の存在が析出される過程を追体験しようとする一つの試みに過ぎません。「文書」が「歴史」(History)を創る、あるいは「歴史」は「物語」(Story)である【独・仏語等ではこの2義は同一語】——これらの定義は、あまりに自明かつ陳腐で、ヘロドトスの原語義が「探究」であることが亡失されていて、筆者の歴史的想像力を刺激することが全くありません。

■ いずれにせよ、最古代の「記述文化」の黎明期に臃気ながら姿を現しつつあったこれらの〈記述者〉達は、紀元前2千年紀になるとメソポタミアとエジプトのみならず、言語学史的には別系統の印欧語族に属するインド（古聖歌）、イラン（ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』）、アナトリア（ヒッタイトの古神話）の地でも、盛んに独自の「創作活動」を開始し出しますが、それらの主題は、押しなべて「神」および「神々」に纏わる「物語」でした。とりわけ、粘土版楔形文字[碑]文書と石刻版あるいはパピルス版の「象形文字」文書については、文化史的意義の著しく大きい主要な作品は解読者あるいは校訂者自身による自筆稿本【Autograph と呼ばれる】の影印版として、語学的注解や翻訳を添えて、現在ではその殆どが印行されています。それらの「現物」【幸いに、入手可能の刊本の多くは原典研究所に収蔵】に直に目を通して見ると、複雑怪奇な「記号」(Sign)【彼らに「文字」という意識があったかは大いに疑問です】を一心不乱に粘土板や石板に刻み続ける鬼気迫る姿には、まさしく「神を創造」する行為に全身的に憑依し、その法悦に浸り切っている〈記述者〉の姿が、ごく自然に重なり合っただけに見えるのです。かくして、本義における「言語哲学」である〈記述論〉は、『神々は記述に宿る』ことの〈意味・意義〉の起源的解明を試みる、一種の「人文学的神学」と化しました。語学専科の筈の原典研究所が、「〈言語史・宗教史・文化史を主とする〉『世界史概説』」に踏み出した経緯・理由が、上記各項の記述から今は容易に理解され得ることとします。そして同時に、一神論・二元論・多神論・拝一神論・グノーシス【それらの抗争・融合・習合については講義中にも詳細に説明しました】——こうした地下における「神々の戦い」が、紀元前後のヘレニズム期に地上に奔出し、夥しい「宗教イデオロギー」としてやがて「歴史」の原動力となりますが、いわゆる「中世」【今後のテーマ】の開始を前にして筆者が敢えてこの講義を終了したこと。更には、原典研究所の文字通り総力を結集した今回の『世界史概説』が、筆者の半生の〈記述論的〉総括を兼ねるものであったこと、も理解が容易であると思われまふ。

■ 最後に (Last, but not least)、この一文を草する契機となったのは、以下に芳名を掲げた諸君による筆者および原典研究所に対するいつに換らぬ友情と支援に、深甚なる感謝の意を表明するためでしたが、併せて原典研究所の近況を記し、創立25周年と筆者の「第三の人生」の開始に向けた決意を、「新年のメッセージ」に託して諸君に届けることとします。ありがとう！

寄付者氏名（総額 15万5千円；50音順、*は発起人）

*阿部悠樹、*板尾健司、*大江弘之、神尾雄一郎、木村太亮、*佐藤翔、
鷺見雄馬、田口恵子、豊田昂希、二宮周蔵、布施俊輔、古田潤、御手洗佳寿、
*三村一貴、*宮田晃碩、向川堯博